

陳舜臣さんを語る会通信

NO.20

Oct. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年10月10日

1967年43歳 中国歴史物いきなりの三千枚『阿片戦争』

1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し、次々、推理小説を書いていた陳舜臣さんが、いきなり、三千枚におよぶ本格的な中国歴史物『阿片戦争』を講談社から上梓したのは、1967年のことでした。『阿片戦争（上）滄海篇』と『（中）風雷篇』は1967年10月、『（下）天涯篇』は11月の出版です。

陳舜臣さんは後年、『青玉獅子香炉』での直木賞受賞にふれ、「私としては、その前年に出した『阿片戦争』でもらいたかったという気持ちがありました」（集英社『陳舜臣中国ライブラリー29』P. 553）とおっしゃっています。精魂込めたという気持ちと同時に、できればに自信・自負があたりだったのでしょうか。（編集委員橘雄三）



講談社文庫 新装版表紙

《 1. 『阿片戦争』は陳舜臣さんの原点 》

『Who is 陳舜臣』「作品インタビュー『阿片戦争』」から抜粋引用します。下線は編集委員。

小説「阿片戦争」を、私は三年がかりで書いた。江戸川乱歩賞をいただいて（昭和三十六年）、推理作家として著書も十冊ほどあったころだから、ひまにまかせて書いたわけではない。ほかの仕事をしながら三千枚の書下ろしができたのは、やはり若さの力であろう。（中略）

私は小説の形式で中国の近代史を考えながら書きたいという野心があった。近代の開始となった阿片戦争は、とうぜんスタートラインとして濃く引いておかねばならなかった。（中略）

「阿片戦争」出版一年後に、私は直木賞をいただいた。受賞パーティーの席で、選考委員の大佛次郎氏から「きみがいてよかったよ」と言われた。氏は戦時中、大河小説として阿片戦争を書きはじめ、一巻だけで中断されたのである。漢文資料がうまく読めず、他人に頼まねばならなかったのが、中断の理由であったとおっしゃった。（中略）

一九九七年『陳舜臣中国ライブラリー1』



その後、私は太平天国、日清戦争、と時代をくだって近代を書きつづけ、また近代にいたる歴史考察のため時代をさかのぼって、「中国の歴史」を書くことになった。「阿片戦争」は私の原点である。

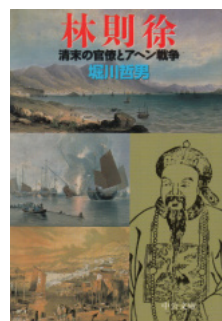
■上記、下線部分について、陳さんは、

こうもおっしゃっています。『陳舜臣中国ライブラリー 2』「小説『阿片戦争』余話」から引用。

私が小説『阿片戦争』を書こうとしたのは、大佛氏の未完の小説を書きつごうというつもりではない。しかし中国文が読めるので、大佛氏よりは資料利用の面で有利な立場にあるという不遜な意識はあった。陳さんの自信が読み取れます。

《 2. 同じ時期、堀川哲男30歳 『林則徐』執筆 》

堀川哲男氏は、京都大学大学院を終えたのちも研修員として東洋史研究室に籍を置いておられました。氏の『林則徐』執筆は、宮崎市定主任教授の若い門下生たちへの課題、指導の一環だったようで、『林則徐』は1966年7月、人物往来社から「中国人物叢書」第十一冊として刊行されました。



中公文庫版表紙

同著の新版（1997 中央公論社）の解説に、堀川哲男著『林則徐』は日本における「林則徐の評伝として第一号であるといっても差し支えないだろう」との記述があります。陳舜臣著『阿片戦争』より少し早い時期の刊行だったのです。当然、陳舜臣さんは『林則徐』をお読みになったでしょう。そう想像するのは楽しいことです。

■堀川哲男氏は54歳という若さでお亡くなりになりましたが、若い研究者を奨励したいというご遺志により、堀川哲男記念賞が設けられました。当時、私（橘）は、舞子浜の孫文記念館（移情閣）に勤めていましたが、同記念賞の運営にかかわったり、奥様にお会いしたことがあり、『林則徐』には特別な思いがあります。

『阿片戦争』の主人公は時代そのものなのだ-奈良本辰也-

《 1. 主な登場人物 》

れんいざい 連維材	裸一貫から廈門の豪商金順記(きんじゅんき)をつくりあげる。商売の主力を広州においたが、厦門に別荘「鴻園」と家塾「飛鯨書院」をあわせた豪邸を持つ。世界の動向を鋭く見ているインテリ
連維材の息子	統文、承文、哲文、理文
おんかん 温翰	金順記の大番頭。連維材が17歳で連家が経営する金豊茂(きんほうも)を追い出されたとき、一緒に行動。林則徐を常に陰から支援
温章	金順記の大番頭温翰の一人息子
彩蘭	温章の娘
れんどうしょう 連同松	連家の本妻の子。金豊茂の主人。連維材の腹違いの兄。経営者として無能で莫大な借財を背負う
シーリン 西玲	印度パールシー族の金貸しの娘で、連維材の女だが、自由奔放なところがあり、伍紹栄ほかとも大胆につきあう。
道光帝	阿片戦争時の清朝皇帝
りんそくじょ 林則徐	阿片取り締まり厳禁論が道光帝の心をとらえ、欽差大臣となる。民族的英雄
ちんかせい 陳化成	猛将。阿片戦争中、江南提督として呉淞(ウースン)で戦死
かんてんばい 関天培	林則徐と肝胆相照らす仲のヒゲの猛将。阿片戦争では広東水師提督として戦死
ムチャンア 穆彰阿	最も力のある軍機大臣。阿片弛禁論をとり林則徐らと対立
チシャン 琦善	穆彰阿の一派。直隸総督。林則徐解任のあと、欽差大臣として広東で交渉にあたる。香港割譲を言い出し罷免される
イシャン 奕山	皇帝の甥。北京は、琦善解任のあと奕山を広東へ派遣
耆英(きえい) 伊里布(イリブ)	この二人を全権とし、ポツティンジャーと南京条約を締結
きょうじちん 龔自珍	号は定庵。公羊学者で詩人。時代の哀世をいち早く知る。軍機大臣の愛妾と深い関係
こうしゃくじ 黄爵滋	鴻臚寺卿。林則徐、龔自珍、魏源らと親交のある直諫の士。道光帝を阿片厳禁論に導く
ぎげん 魏源	公羊学派の巨頭。海防、などにも詳しい経世済民学者
おうきよし 王峯志	遊侠の大首領だが、理知にあふれた澄明な人物。林則徐に力を貸す
ごしょうえい 伍紹栄	広州十三行の総商(理事長)。怡和行の主人
パーマストーン	英国外相。大英帝国の栄光のために1830年から三十余年、英国の外交を指導する。武力をも辞さない強硬派
ネーピア卿	功名心にはやる軍人外交官。初代駐清商務監督。やり方は強引
チャールズ・エリオット	林則徐赴任当時の駐清商務監督。海軍大佐。遠征軍が組織されると、いとこジョージのもとで、全権副使をつとめ、ジョージ帰国後は②総司令官兼特命全権大使に昇格
ジョージ・エリオット	①英国艦隊の総司令官兼特命全権大使。海軍少将。チャールズと意見があわず帰国
ヘンリー・ポツティンジャー	チャールズ罷免後の③総司令官兼特命全権大使。1841年8月、着任。南京条約締結

《 2. 主人公は時代そのものなのだ-奈良本辰也-》

『阿片戦争』(1973 講談社文庫)解説より抜粋引用。

この三千余枚におよぶ大作にはじめて接したとき、私はある種のとまどいを感じた。なにか勝手がちがうのだ。それは、今日まで私が親しんできた歴史小説と、ひどく異質な味わいをもっていたのである。たとえば、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」、あるいは「国盗り物語」にしても、子母沢寛の「勝海舟」、野上弥生子の「秀吉と利休」にしても、いずれもすぐれた歴史小説であるが、これらの作品に共通するのは、すべて人間が主役となっていることである。

作家たちは個人を思いきり個性的に描くことによって、かつて人間不在であった歴史に生き生きした息吹を吹きこんだ。読者はそこに躍動する人間の行為によって、はじめて遠い時代を身近にひきよせることができたのである。(中略)

「阿片戦争」の主役は阿片戦争そのものなのだ。この作品の場合、どの人物をとりあげても、この小説の主役とは言いがたいのだ。林則徐にして然り。作者が作中もっとも重要な役割をふりあてている連維材という人物も、時代を象徴する英雄としては描かれていないのである。氏にとって阿片戦争は事件ではない、時代そのものなのだ。



『阿片戦争』、『太平天国』ほか、陳舜臣さんの多くの歴史小説において、まったく同じことが言えます。このことは、陳作品の長所であって、短所でもあります。つまり、陳作品は感情移入しにくく、北方謙三、宮城谷昌光らの中国物を読むときの、手に汗を握り、ぐんぐん引き込まれていくような高揚感はありません。無い物ねだりということでしょうか。



1841年1月、広州海口で中国のジャンク船を攻撃するメネシス号(東京書籍「図説世界史」)

毎日出版文化賞受賞『実録アヘン戦争』の執筆動機 及び章立て

『阿片戦争』、『太平天国』、『江は流れず』、『山河在り』は、陳舜臣さんの中国歴史小説四部作といえます。ところで、『江は流れず』では連家・温家の人々は登場せず、実録風になっていることについて、陳さんはこうおっしゃっています。

『阿片戦争』のようなやり方は、ちょっと調子に乗りすぎると歴史小説としておかしくなるんじゃないかな、ということを以前から思っていたんですよ。たとえば舞台回しの役を、架空の人物に委ねてしまうということ、そういうことを時どき反省するんです。（『陳舜臣中国ライブラリー6』「自作の周辺」）

陳さんは、『阿片戦争』の執筆においても、架空の人物の描写に筆が走りすぎないように抑えていたと

読み取れる文章です。

陳さんは、また、こうもおっしゃっています。

小説『阿片戦争』を三千枚近く書いたが、その枚数をけっして長いとは思わず、またそれで書き尽くしたというかんじもなかった。（『実録アヘン戦争』「まえがき」）

そのような思いの中から生まれたのが『実録アヘン戦争』なのです。（編集委員 橘 雄三）



中公文庫版表紙

『実録アヘン戦争』章立て

第一章 哀世	傾斜の時代	清朝（北京入城1644年～宣統帝退位1912年）の全盛期は康熙61年・雍正13年・乾隆60年の時代。康熙が蓄積し、雍正が維持し、乾隆が散じたといわれる。乾隆帝に続く嘉慶帝は、ひたすらボロ隠しに終始し、続く道光帝の時代にアヘン戦争(1840-42)がおこった
	都落ちの詩人	陳舜臣さんは龔自珍(きょうじちん)が好きだ。龔自珍を哀世を象徴する詩人として描いている。1839年・己亥(きがいの)年、20年にあまる官吏生活に終止符をうって帰郷する。「己亥雜詩」315首が有名。時に48歳
	宣南詩社	龔自珍らが属した詩作グループで、公羊学的傾向の濃い人物が少なくなかった。憂国の詩論を交わし、政治体制の批判に及んだ。同人には、黄爵滋、魏源らがいた。陳舜臣さんは林則徐を詩社のホープとして描く
第二章 ひるねの友	奇形通商	18世紀後半、イギリスは中国から茶を買い入れ、新大陸からの銀で支払うという片貿易になっていた。18世紀末から、片貿易打開のため、中国の茶を本国に、本国の綿製品をインドに、インド産のアヘンを中国にという三角貿易を編み出した
	罌粟の妖魔	もともと、アヘンは中国にはなかった
	漏銀	中国におけるアヘンまん延は、茶では賄えず膨大な銀の流出をもたらした。これは、中国国内の銀価格の高騰、相対的に銅価格下落、税額増を伴い、人々の生活はどんどん困窮の度を増していった
第三章 狭い門戸	夷館	広州の一角を外国人居留地とした。外国商館を「夷館」、この地区を「十三行街」といった → 
	公行	外国商人「夷商」との窓口になる清国特許商人「行商」は十社あり、「行商」たちは、「公行」というギルドをつくっていた。「公行」の代表者を総商といい、アヘン戦争時、怡和行の主人である伍紹榮がつとめた
	密輸	アヘンは禁制であるが、十三行街の夷商たちは、ほとんどがアヘンを扱い、その倉庫として、store-shipを珠江河口沖合に浮かべていた
	選手交替	イギリスでは、産業革命の発達にともない産業資本家が台頭、中国貿易における東インド会社の独占権が廃され、かわって、駐清商務監督（領事）の職が設けられ、1834年、ウィリアム・ネーピアが着任した
	ネーピアの敗北	ネーピアが着任通知を書面で両広総督に渡そうとしたのが事件の発端。「夷人が直接、清朝当局に書面を出すなど無礼千万、総商の伍紹榮を通せ」、「商務監督はイギリス政府の代表である」と譲らず、双方、軍事力を使用、6年後のアヘン戦争の前哨戦となる
第四章 論争	広東の夢	広州「学海堂」の教授たちは、学長・呉蘭修を筆頭に、アヘン禁令を弛めることでアヘン問題を解決できるという現実論をもっていた。伍紹榮ら公行のメンバーも、アヘンを合法化しその取引を公行の商人が独占することを願い、それには、アヘン弛禁論が公行の利益に合致すると考えた。
	許太常奏議	1836年、太常寺少卿許乃濟は、「学海堂」呉蘭修の知恵・教示を得て、アヘン弛禁論を内容とする奏文を書いた。これが許太常奏議である
	反論おこる	奏文は取りあげられ、広東省の諸官に「綿密な調査の上復奏せよ」との勅が発せられた。この広東復奏も弛禁論支持であった。しかし、これら弛禁論に対する反論も続出した。
	厳禁論の決定版	厳禁論の決定打は、1838年に提出された宣南詩社同人・黄爵滋の奏議であった。その核は、「アヘン吸食死罪論」

『実録アヘン戦争』章立て（続）

第五章 点火	皇帝発奮す	皇帝は黄爵滋の奏文を各地の総督、巡撫など高官に送り意見を徴した
	林則徐登場	最も優れた覆奏をした湖広総督林則徐は北京に呼び出され、道光帝の召見・垂問は8日に及んだ
	言い難きものあり	宣南詩社同人龔自珍は、林則徐の滞京中にアヘン問題にかんする自分の意見を文書にして手渡した。これに対し、林則徐は返書はしたためず、わざわざ、信頼できる者を遣わし、その「言い難きもの」を説明させた
	南をめざす	欽差大臣林則徐、赴任途上、広東の布政使と按察使に、アヘン密輸に関係する重要犯60名の逮捕を指令。「やる気」を示す。1839年3月、広州着任
第六章 虎門の煙	実力行使	林則徐は着任早々、公行に、夷人から「こんご永久にアヘンを持ち込まない。もし持ち込めば、人は正法（死刑に処）し、貨はことごとく官に入れる」という誓約書を取れと命じた。ここにアヘン戦争は点火されることとなった
	天の厭うところ	誓約書が出ないので、林則徐は、官兵をもって英国駐清商務監督事務所を包囲、時の駐清商務監督エリオットを屈服させ、アヘン2万箱を没収
	煙は海国に深し	虎門海辺、やや高い場所に二つの池を掘らせ、アヘン焼燬（しょうき）をおこなった。作業は民衆にも公開した
	権臣内にあれば	このような林則徐の成果を君側の権臣は苦々しく見ていた。直隸総督琦善がその筆頭であった
第七章 戦火	追放	1839年7月、九竜の尖沙嘴で、村民が、酔ったイギリス人に棍棒で殴られ死亡するという事件が発生。その犯人引き渡しがかじれ、林則徐はマカオ在留のイギリス人に食料の供給を禁じるなど圧力をかけ、これに屈したイギリス人はマカオを退去
	九竜と川鼻に波高し	1839年9月、九竜沖海戦。11月、川鼻の海戦
	北京・ロンドン強硬	北京とロンドンの対立は、現場の林則徐とエリオットの対立よりも、はるかにするどいものになっていた。1840年2月、英国政府、正式に清国派兵を決定
	舷々相摩して	総司令官兼特命全権大使にはジョージ・エリオット少将が任命され、シンガポールに集結した主力が中国に向けて進発したのは1840年5月末のことであった
第八章 アヘンのために	艦隊北上	遠征軍の主力艦隊は広州を素通り、上海に近い舟山列島まで北上し、1840年7月、定海知県に降伏勧告を突きつけた。降伏勧告は拒否され定海は戦場となった。舟山を占領した英国艦隊の一部は更に北上、天津沖に達し北京との交渉に持ち込んだ。直隸総督の琦善が両エリオットとの交渉にあたった。琦善は、天津は北京に近く、道光帝の動揺が大きいことにかんがみ、交渉の場を広東に移すことを提案し、成功。皇帝は林則徐を罷免、琦善を欽差大臣に任じ、交渉にあたらせた。1840年10月、林則徐のもとに解任の公文届く
	再び広東にて	広東での交渉で、琦善は譲歩に譲歩を重ね、イギリスは、清国が全面降伏したものととして、商港の開港、島嶼又は海港の割譲ほかを要求。一方、道光帝は、英国艦隊が南へ去ると再び態度を硬化、広東での交渉内容を知ると交渉打ち切りを指令。交渉決裂し、英軍の広東攻撃は1841年1月、2月と続く
	南に北に	弱腰交渉の琦善は罷免され、代って奕山着任。5月下旬、英軍攻撃再開、広東占領。ついで、厦門、更に北上、杭州湾岸の海港を攻略、揚子江に侵入、呉淞を陥れ、1842年には上海、鎮江を占領、8月、南京に迫る。このような事態に北京は耆英（きえい）、伊里布（イリブ）を全権とし、ポッティンジャーと南京条約を締結
	不義の戦い	アヘンこそが、疲弊したベンガル政庁の財政にとって、命の綱ともいべき収入源であった。清国がアヘンを買わなくなれば、英国のインド支配は揺らぐのである。イギリスは、どうしてもアヘンのために戦わねばならなかった。産業革命を成し遂げ、国運隆々たるビクトリア朝英国と、乾隆の盛時のあと始末に汲々としていた衰世の道光帝清国とが、戦火をまじえねばならなかったのは皮肉であった。
第九章 ム の 時 代 ブ リ ズ	星斗南	アヘン問題・アヘン戦争は、「黄爵滋の問題提起を、林則徐が現場でつなぎ、魏源はそれをつぎの世代に伝えた」。もう一人加えるなら、予言者・龔自珍である。林則徐は、十年後、欽差大臣として太平天国鎮圧に向かう途中、病死する。臨終のとき天を指さして、「星斗南」と三度叫んだという。判じものめいて、意味は不明
	漁夫の利	アヘン戦争に対し、アメリカやフランスは「観望して待つ」という政策を採り続け、通商条件の面では、イギリスとほぼ同じ成果にありついた。望厦条約（対米）、黄埔条約（対仏）がそれである。



イギリス軍艦コーンウォリス号内での
南京条約締結風景

中央テーブルに両
国全権。左が清国、
右がイギリス

(From Wikimedia
Commons)

↑ テーブル斜め手前は犬